opusdei.org

属人区長の書簡 (2013年1月)

イエス・キリストは神であり、真の人間です。これが属人区長の一月の書簡のテーマです。聖霊によって、童貞聖マリアの胎内に宿られた神の御子の受肉についてです。

2013/01/13

愛する皆さん、イエスが私の娘たち と息子たちをお守りくださいますよ うに! 私たちは、このよき知らせを皆に知らせる熱意を固めます。主の降誕祭が近づくたびに創立者は、何とられておいてはいるとではないでしょう。「どんな片隅中のに大事にされ、世界中に大事にされ、世界中にようながある。古れの国々で老いも若きもいないもってもないまないもってもないないできたクリスマス・キャロルを歌い

つつ、主を知らない人や主を愛していない人たちが主に無関心で沈黙きまていることを、正そうと努めてきました。それらの歌には、いつも神なる御子に会い、眺める願いが込められていることに気づいていますら。『急いでマリアとヨゼフとまぐった(ルカ2,16)』あの幸せな夜の羊飼いたちのように。| [ii]

ここ数日、この偉大な神の御慈悲に 心底驚き、それを観想しました。驚 嘆しないわけにはいきません。「揺 籃(ゆりかご)の中の我らの愛である 幼子を見つめ、奥義を前にしている ことを知らねばなりません。信仰を もってその奥義を受け入れ、同じく 信仰をもって奥義の深い意味を究め ねばならないのです。」[iii] ですか ら、取るものも取りあえず馬屋に急 いだ羊飼いたちを見習うと同時に、 次のご公現の大祝日に思い起こす博 土たちの模範に注目することです。

彼らは信仰があり、謙遜でしたか ら、長い旅路で遭遇する困難を乗り 越えることができました。神が彼ら の心を照らし、星の輝きの中に救い 主の誕生を読み取ることができるよ うにしてくださったのです。彼らは 素直でした。全てを自由に神に委ね たのでベトレヘムまで導かれたので す。そこで聖家族がお泊まりになっ ているところに入り、「子どもが母 のマリアと一緒においでになるのを 見た。そして彼らは平伏して礼拝 し、宝箱を開けて、黄金と乳香と没 薬とのみやげ物を献上した。| [iv]

私たちも、秘跡を通してもたらされる恩恵の勧めに素直でありましておう。また、その勧めは、念祷にるといても、福音書の場面を黙想での勧めても、これるも、これる時にも、もたらされます。とは全く理に適っています。

「人間精神の弱さからして、神的な事柄の認識に到る場合と同じく、神的変においても、われわれに知られた知られかの可感的な事物によって事物によって必要となる。それら事物性であって、そのことは叙唱(降誕祭る中であって、そのことは叙唱(降誕祭る・見かられし神を認めしにより、るのである。」[v]

ミサ聖祭の使徒信条は贖い主の受の神秘をいとも単純な言い回しめ、神の御子が「われら人類のために天からの教いのために天アより」「vi」がおとめておりたます。深くするこの数かあるこのでは、はなりではいます。この引用句は、精巧な金ではないます。この引用句は、精巧な金ではないます。この引用句は、精巧な金ではないます。この引用句は、精巧な金

銀細工のように、三つの福音書が伝 えているご託身に関する話を如実に 反映しています。聖マタイは、聖ヨ ゼフへ神秘の知らせを語る天使に、 おとめマリアの御子を表すのと同じ 言葉を使わせています。「その子を イエスと名づけよ。なぜなら、彼は み民をその罪から救うお方だからで ある。| [vii] イエスのご託身とご誕 生は、神の無限の御憐れみを表して います。私たち人間は、原罪と自罪 によって、自分の力だけで神に立ち 戻ることは到底できません。それ で、神が私たちに出会うために降ら れたのです。「神は御独り子をお与 えになるほどこの世を愛された。そ れは、彼を信じる人々がみな滅びる ことなく、永遠の命を受けるためで ある。| [viii] 本当に深い信仰をもっ て生きるようにと促す、創立者のあ の考察を思い起こしましょう。「神 の神秘に対しては、信仰を失うどこ ろか、驚嘆するばかりです。| [ix] 細やかにイエスと付き合うようにし

ていますか。愛していることのしる しとして、私たちに従うことを求め る全能の主に感謝しているでしょう か。

Verbum caro factum est[x] みこと ばは肉体となった。神のみことば は、旧約聖書におけるように、ただ 私たちに語るために近づかれたので はなく、おとめマリアから体と血を 受け取って、アダムとエバの子孫で ある私たちと同じ人間になられまし た。罪を除いて、私たちと全く同じ 人間になられたのです[xi]。主がこ の世に来ることをお望みになったの は、私たちに「地上のあらゆる道、 つまり生き方、あらゆる状況や職 業、全ての正直な仕事は神的なもの にできることを | [xii] 教え、そし て、紹自然的人間的に完全を期して 聖なる生活を送るよう励ますためで す。私たちと共におられる神は、何 と限りなく素晴らしいやり方で私た ちに近づかれることでしょう。

聖ルカは、聖母へのお告げを語ると き、神のご計画を説明する大天使ガ ブリエルとマリアの対話を取り上げ ています。「聖霊があなたにくだ り、いと高きもののかげが彼方をお おうのです。ですから生まれるみ子 は聖なるお方で、神の子と言われま す。」[xiii] 神の三つのペルソナは一 致してマリアに視線を注ぎます。三 位一体の神は永遠から、本物の契約 の櫃、罪人の拠り所とするために、 マリアをお選びになり、神の御子が その清い胎内で人間の肉体をとられ ることになさいました。聖母がすぐ にきっぱりとfiat

mihi secúndum verbum tuum [xiv], あなたのおことば通りになりますように、とお答えになったことで、この偉大で慰めに満ちた神秘の扉が開かれました。私たちは毎日、救いの歴史上またとないこの瞬間を記念して、お告げの祈りを唱えます。どのような信心を込めてこのお祈りを唱

えているでしょうか。神のご計画を全面的に受け入れ、従われた聖母に心から感謝しているでしょうか。聖ホセマリアのこの考察を深く深く味わいましょう。「お母さま、あなたはあの〈なれかし〉の一言で、私どもを神の兄弟、神の栄光の世継ぎとしてくださった。御身は祝せられたまえ。」[xv]

これらのことや列挙しうる数多くのことを、次のように一つにまとがることができます。「みことばが人となられたのは、私たちを『神の本性にあずからせる』(2ペトロ1,4)ためです。みことばが人となられ、神の子となられたのは、人の子となられたのは、人の子となられたのは、親子の縁を結び、神の子となるためです。」[xvi]

イエス・キリストは、真に至聖三位一体の第二のペルソナであられます。 神でありながら私たちと同じ人間性

をお取りになった、永遠の御父の御 子です。イエスは、神性と人間性の 混合が不可能であるように、神性と 人間性を分かちもつ存在ではありま せん。〈Quicúmque〉(クイクムク エ)あるいは聖アタナシオ信条で唱 えるように、〈完全な神、完全な 人〉です。深遠なこの真理を究める よう努めましょう。この真理により 深く入り込み、それを人生の拠り所 にするように、そして聖なる熱意を もって人々にそれを伝えることがで きるように、光をお送りくださいと 聖霊にお願いしましょう。いつもど のような状況においても、イエスの 兄弟であり、キリストにおいて父な る神の子供である聖なる誇りをもっ て過ごすべきであることを忘れない ようにしましょう。

再度、それを考察することにしま しょう。「次のことを信じ、表明す るのが正しい信仰である。われらの 主イエス・キリストが神の子であり、 神であるとともに人間であり、父の 実体から全ての時に先立って生まれ た神、母の実体から時間において生 まれた人間、完全な神、理性的な霊 魂と人体を備えた完全な人間、神性 においては父と同等であり、人性に おいては父に劣っている。神である と同時に人であるが、二人ではなく 一人のキリスト、神性が肉体に変化 して一つになったのではなく、人性 を受けたのである。実体の混合に よって一体となったのではなく、位 格の一致によって一体となったので ある。| [xvii]

明らかに、非常に輝かしい神秘に出会って、私たちの理性がそれを考察すると、眩んでしまうのです。非常に粗末な類比ですが、太陽を直視しようとすると、あまりのまばゆさに目をそらさなければならないす。受しては、創立者が示した。 選択肢以上のものはありません。 「キリスト信者としての謙遜な心構えが必要です。神の偉大さを人間の貧弱な概念を用いて説明したりせず、たとえ理解できなくても、この奥義は人生を導く光であることを悟るべきです。」[xviii]

ベトレヘムの馬屋には、単に神の無 限の愛だけではなく、計り知れない ほど深い神のへりくだりも表明され ていることが分かります。産声を上 げ、寒さに震えマリアとヨゼフの愛 情を必要としているこの幼子は全能 永遠の神なのです。その神が、この 世にお降りになるため天を去ること なく、神の栄光から抜け出ることを お望みになりました。「彼は、本性 として神であったが、神と等しいこ とを固持しようとはせず、かえって 奴隷の姿をとり、人間に似たものと なった。| [xix]この素晴らしい現実 に、〈主よ、なぜこれ程までに私を 愛してくださるのですか〉と創立者

が度々叫んでおられたことが理解できます。

ベネディクト十六世はこうコメント しておられます。「キリスト教のり 説とは、正に、神の知恵、一をは、 正に、神の知恵、歴史の の人間、ナザレのイエスと同のの であると文字で始まる〈**愛**〉以外には 説明できい でかませ 人間、歴史的範疇を ということなので 説は、大文学で始まる (神の愛) は に関わること ということは に関わること に関わること に関わること といっです。」 [xx]

人となられた御子の教えを受け入れるには謙遜でなければならないことが、はっきりするように、聖書は、神の自己放棄の証人として、の近辺で羊の番をしている貧しく純朴で飼みらあまり取りました。主が役となりました。主が彼らに目を止められたのは、「慈しみ

深い神の心を捉えるのは、何よりも 謙遜な心」[xxi] だからです。後ほど イエスご自身が、天の御父にこう感 謝しておられます。「あなたはこれ らのことを、知恵ある人賢い人に隠 して、小さな人にお表しくださいま した。父よ、そうです。あなたはそ うお望みになりました。」[xxii]

博士たちも救い主を認めることがで きました。それは、彼らが単純な心 の持ち主であり、寛大な心で神のし るしによく注目していたからです。 「主は全ての人々に向かって、ご自 分との出会いを求めるように、聖人 になるようにと語りかけておられま す。賢人であり、権力もあった博士 たちだけをおよびになったのではり ません。その前に、ベトレヘムの羊 飼いたちに、星ではなく、天使をお 遣わしになったのです(ルカ2,9参 照)。とは言え、貧しい人も富んだ人 も、賢人もあまり賢人でない人も、

神のみ言葉を受け入れるための心構 えを持たねばなりません。」[xxiii]

聖ホセマリアが度々、主のご降誕の 場面を私たちに示してくれたことを 感慨深く思い出します。「ベトレヘ ムの教壇しについて話されました。 そこでは幼子イエスが多くのことを 教えています。中でも、特に謙遜に ついてです。私たちが神なる幼子を 眺めつつ、自分の高慢やおごりに打 ち勝つことを学ぶためです。さらに おとめマリアに注目すると感嘆しま す。主がご自分の御母にするため、 人間的な言い方ですが、マリアに魅 せられたのは、特にその謙遜、その 慎ましさでした。「主がいやしいは しために御目をとめて下さったから です。これから後、世々の人々は私 を幸いな女(ひと)と呼ぶことでしょ う。| [xxiv]

私たちが主にお願いすべきこの心構えは、日々携わっている仕事を、で

きる限りの手立てを講じて効率よく 果たす熱望をそぐことにはなりませ ん。私たちは日々の務めを通して神 を称えるのですから。逆に教皇様は こうコメントしておられます。

「〈上智の座〉マリアのように〈慎 ましい〉精神、謙遜で単純な心を持 ちつつ、勉強したたり、知識を深め たりすることです。何と度々、私た ちは、ベトレヘムの馬屋に近づくこ とを恐れ、自分の批判精神や〈現代 流〉に差しさわるのではないかと躊 躇したことでしょう。そうではな く、この馬屋で、私たち一人ひとり が、神について、人間についての真 理を見出し、自分自身を知ることが できるのです。おとめマリアから生 まれたこの御子に、神の真理と人間 の真理が出会うのです。人間が永遠 の命を渇望していることに神は〈心 を動かされ〉、人間性をお取りにな ることを恥とされなかったので す。| [xxv]

訪ねたベロナでも、一皆さんや他の多くの人と何と素晴らしい時を過ごしたことでしょう一、先月の半ばに世界中のあらゆるところから届いた知らせでも、それが「分かり」ます。

新年の初めにあたって、神の母マリアの大祝日、また今月、オプス・ディの歴史上、深い意味を持つ日々には、聖マリアにより頼みつつ、皆さん一人ひとりと皆さんの家族、皆さんの仕事と使徒職を、祝福してくださるよう主に懇願します。

心からの愛を込めて祝福を送ります。

皆さんのパドレ

†ハビエル

ローマ、2013年1月1日

[i] ローマミサ典書、神の母・聖マリアの大祝日の第二朗読(ガラテア1, 4-5).

[ii] 聖ホセマリア、1973年12月25日 お説教のメモ。

<u>[iii]</u> 聖ホセマリア、『知識の香』13 番。

[iv] マタイ2,11.

<u>[v]</u> 聖トマス・アクイナス『神学大全』II-2, q.82,a. 3 ad2.

[vi] ローマ・ミサ典書、ミサ通常文、 ニケア・コンスタンチノープル信 条。

[vii] マタイ 7,21.

[viii] ヨハネ3,16.

[ix] 聖ホセマリア、1973年10月25日 会談のメモ。 [x] ヨハネ 1,14.

[xi] ヘブライ 4,15参照。

<u>[xii]</u> 聖ホセマリア、『会見記』26 番。

[xiii] ルカ 1,35.

[xiv] ルカ 1,38.

[xv] 『道』512番。

[xvi] 『カトリック教会のカテキズム』460番。聖イレネオ『異端反 駁』3,19,1:[PG7,939]。

[xvii] クイクムクエ信経30-36(デン ツィンガー,76番)。

<u>[xviii]</u> 聖ホセマリア、『知識の香』 13番。

[xix] フィリッピ 2, 6-7.

[xx] ベネディクト十六世、2009年12 月17日の前夜のお説教。

[xxi] 福者ヨハネ・パウロ二世、 1996年11月6日一般謁見の講話。

[xxii] マタイ 11,25-26.

[xxiii] 聖ホセマリア、『知識の香』 33番。

[xxiv] ルカ 1,48.

[xxv] ベネディクト十六世、2009年 12月17日の前夜のお説教。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/shuren-qu-chang-noshujian-2013nian-1yue/ (2025/11/26)